#170

スズムシソウ

Liparis makinoana

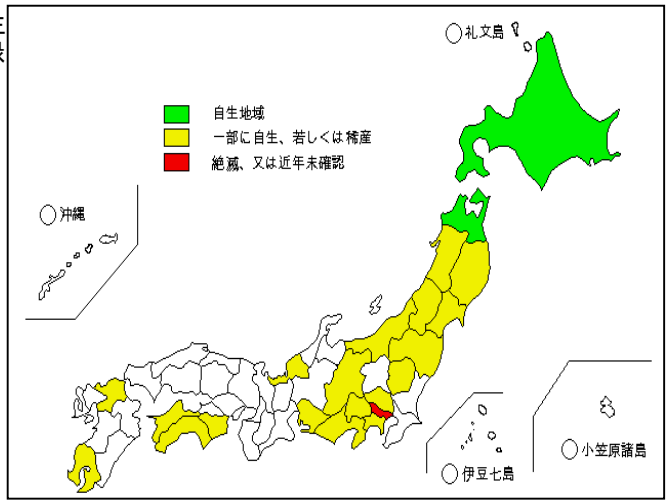
スズムシソウ（愛知県栽培品10.4.22）

全国（特に関東以北）の冷涼な山地に自生する中型の地生蘭です。リパリス属を代表するランで、5～10cm程度の薄緑色で幅広い2枚葉を展開し、5～6月頃に中央から花茎を伸ばし茶色く透き通った昆虫の中羽のような花を複数輪咲かせます。

派手さはありませんが透明で複雑な形の花はまさにスズムシのようで美しく、草丈に対して花も比較的大きく観賞価値が非常に高いことから大変人気のあるランです。

ラン科の植物は受粉効率を上げるために、虫に似せた花をつけるよう進化した種があります。サギソウや本種はその最たるもので、まさに自然界が長い年月をかけて作り出した奇跡の芸術品といえます。

大変美しいランですが、自生地では壊滅的な状態です。分布が全国に渡ることから全国版のRDBでは未指定ですが、各県版ではほぼ自生が見られる全ての県において「CR」、「EN」といった高い絶滅危惧ランクが付けられております。



全国の冷涼な山地に自生します。

スズムシソウの花（愛知県栽培品10.4.22）

本種は同属のクモキリソウやジガバチソウと極めて草姿が似ており、開花時でないとまず判別がつきません。あえて判別基準を示すとしたら、クモキリソウはやや大型、ジガバチソウはやや小型で葉脈が網目状に広がる、スズムシソウはやや硬質で葉脈は縦に入りやや波打っている、くらいでしょうか。いづれも個体差があるため確証はありません。落葉性リパリス属はバルブの状態ではほぼ判別不能です。

例に漏れず開発や盗掘の被害も大変多いのですが、クモキリソウやジガバチソウに比べると元々の自生域も限られているようで、野山で出会う率としては、クモキリソウ（70%）＞ジガバチソウ（20%）＞スズムシソウ(10%)というところです。但し前者が混在する自生地は少なく、バランスよく住み分けていることが多いです。

（希に両種が混在し、自然交雑を起こして花を見てもスズムシソウかクモキリソウか、はたまたセイタカスズムシか判断に困る固体に出会うこともあります）

Document and photo by LittleFlower 2010

数あるラン科植物の中でも観賞価値が高く人気も強いことから野草店などでよく目にします。専門業者が僅かに商用生産していることから500～1000円程度で入手できます。但し田舎の野草店や市場などでは未だに平然と盗掘株を販売しているケースも多いです。
　栽培はある程度の知識と環境があれば比較的容易です。
ミズゴケ単用や山ゴケ上、赤球、鹿沼等一般山野草用土で植えられることが多いです。通風不足による軟腐病とナメクジの食害、抜け落ちによる乾燥（根が貧弱な為）、夏の猛暑などの対策をしっかりと行い、十分な湿度と通風、半木陰の環境で栽培すれば元気に育ちます。
　株繁殖は困難で、増殖は実生便りです。自生地でも群生することは無く一定間隔で点在することから実生に頼って繁殖していると思われます。希にバルブ頭頂部やバルブ傷から脇芽を出して新たなバルブを形成することがありますが、これはあくまでイレギュラーなので栽培下では親株撒き、または無菌培養での増殖が現実的です。

スズムシソウの葉（愛知県栽培品10.4.22）

スズムシソウの花（愛知県栽培品10.4.22）

　近縁種の落葉リパリス属にはクモキリソウ（緑花で花弁、距が小さい）、ジガバチソウ（濃紺色で花弁が小さく居が長い）、セイタカスズムシ（大型で花数が多く小花）などがあります。
　また四国産の軸まで黒く色が濃い固体を四国黒スズムシとして区別し重宝されています。
　また樹上に着生し、小型で反り返った花を咲かすフガクスズムシがあります。本種は亜高山帯に自生し樹齢何百年のブナの大木の樹上の苔の中などに根を伸ばし着生します。

スズムシソウの草姿（愛知県栽培品10.4.22）

スズムシソウの花（愛知県栽培品10.4.22）